

しあわせとしあわせそうな顔が
ずっと離ればなれで米だけ残す

白野 新潟県

「しあわせ」になれない。心と体が離ればなれになったまま、主体だけが取り残されている。心も体も離れたら、自分はどこにいくのだろう。本当はしあわせと思う・笑う、どちらかだけでもいいのに。自ら遠ざかり、米の乾いた白色と取り残される。暗い空間だ。

きのうまで稲妻だったキリンたち

松下 誠一 東京都

形がないときは、何処へでもいける。心と身体が同じくらい軽くいまま自由でいられる。けれど、足を、身体の形を持たされたら。野生であっても縛られ、土に汚れる。「きのうまで」別物であったと言われると、進化の過程で完成されているはずのキリンの姿が生々しく感じられてしまう。命を保つための形を持たされる重たさ。

憧憬を世界に向けて放ってる

一味か七味か分からないまま

からすまあ 神奈川県

「憧憬」とはあこがれのこと。私たちは無責任に世界にあこがれを抱きながら生きる。「放ってる」間は美しいから、いくらでもかけ続けたい。しかし過度にあこがれを抱くと世界は辛く、苦みばかりを増してしまう。かけるのも自分、そしてその落地点にいるのも自分なのだ。

さみしいとき

硝子の花瓶に這った舌

Im 沖縄県

さみしさは最も人を狂わせる。花瓶を舐める行為が一体何を満たすのか本人でさえ分からないけれど、そうせずにはいられない歪みがあった。粘膜の部分が露わになると、より悲壮感が強まるように思う。開かれた口から、粘膜が寂しさがむき出しになる。

晩冬の螺旋ばかりの試し書き

李いう子

佐賀県

たしかに、と思わず頷いてしまった。文具売り場で試し書きをする際、ついくると螺旋を描いてしまう。もしくは「あいう」とか。誰もが試し書きの紙の前では無個性になり、思考が停止する。皆が同じことをしている列に入っても“視る”ことをやめない。

吊るし雛から川の音してきてる

吉沢

美香

宮城県

長く継承されてきた文化には、それまでの時間や想いが宿る。「川の音」から風や、たくさんの方が営んできた日々の気配、そして今ここにいる主体が涼やかな存在となって繋がる。手ざわり、というかけがえのないものが、過去と今、そして未来を繋げてくれるのだ。

夏風邪の宙には

ナポレオンフィッシュ

Flima

神奈川県

分からないけれど、夏風邪はたしかに大きな魚の姿をしている気がする。汗ばんで冷えた皮膚を凝視する眼のぬめり。弱っていたら食べるといふ方程式は人間にはない故に、私たちは害意に弱い。宙をゆつたりと動くひれや鱗の照りが夏風邪の視界に歪みながら映る。布団は海底にある。捕食されるのを待つのみ存在となってしまう。

これは美しい窓です

これは海の模型です

ここからが数学の出番です

香取小春

宮城県

美しいものをただ感受するなら、そのままでもよい。けれど、仕組みを理解したり自分で作りたいとき、感じるままでは何もできない。自然に存在しているように見えるものすべては、何者かが解いた数式の中にある。「美しい窓」は一見凡庸に思えるが、読み手は自分の感じる美しさと相対する。各々の感受性によって深みが変わる、窓の存在。

Summerの筆記体は簡単

きみの気がすむまで

波を書き足せばいい

汐見りら

東京都

受容とは、待つこと。待つとは、優しさのこと。近い存在であるほど優しさの意味は見えなくなり、つい先回りして手を出してしまう。波のような筆記体の「エ」。書き続けている間に端が見えなくなり、海になってゆく。「きみ」と二人でその海を眺める。

かたつむりどうやらサンゴ礁の夢

日下部 友奏

群馬県

誰もが、ちがう誰かの夢の中の存在なのかもしれない。もし海洋生物が陸を夢見ることによって私たちは存在しているのだとしたら。かたつむりの存在の一部はサンゴ礁の眠りの世界に繋がっている。直接干渉し合うことはなくても、存在させ合う。